9　沖縄周辺重要水産資源調査

喜屋武俊彦、川崎一男
友利昭之助、金城武光

1. 目　　的

沖縄周辺海域で網漁業、一本釣漁業の対象となる主要魚種について資源調査を恒久的に実施し、それぞれの資源の生態、資源の変動法則を明らかにして、沿岸近海漁業の管理および合理的生産体系の確立をはかる。

2. 材料および方法

カツオ一本釣（本部、宮古、石垣）、カツオ類ひき縄（糸満）、タカサゴ類（県漁連）、トビウオ類（県漁連、糸満）の魚種と地区で次のような調査を行う。

1）個体生態調査

漁獲物を通じて成長と年令、成熟、産卵、系統群、回遊等について知県を得る。

a）体長測定調査

b）体長、体重調査

c）胃内容物、生殖腺調査

2）漁獲量調査

a）水揚地調査

b）標本船調査

3）標識放流調査

3. 結　　果

カツオ一本釣

昭和54年度の本部の近海カツオ１本釣船は53年度より１隻減船し３隻で、漁獲量は289,671 kgで昨年の106％で昨年並であった。１隻当り漁獲量は96,557 kgで昨年の141％で増加した。漁期は４月から10月、盛漁期は４月で昨年より２ケ月早かった。宮古島の近海カツオ１本釣漁獲量は11隻出漁し、523,164kgで昨年の52％であった。漁期は５月から９月まで、盛漁期は７月で昨年同様であったが漁期は１ケ月短かった。石垣島の近海カツオ１本釣の漁獲量は10隻出漁し、582,239 kgで昨年の71％であった。漁期は６月から９月の４ケ月間であった。標本船、調査船図南丸のカツオ漁場調査より沖縄近海のカツオは前半は小判主体、中半、後半は大中判主体であった。

南方基地のカツオ１本釣は４月から12月までに昨年同様54隻出漁し、43,991.^{8}トンの漁獲量で昨年の76％で減少した。基地別、会社別漁獲量はソロモン（大洋漁業）、23,525.^{9}トン、ラバウル、キャビアン（大洋漁業）、12,800.^{7}トン、ラバウル（海外漁業）、5,086.トン、パラオ（大洋漁業）2,578.^{8}トンであった。

ひき縄（糸満）

糸満漁協市場に水揚されたひき縄の総水揚量は30,094.2kgで昨年の63%で減少した。魚種別にはカツオ類6,699.3kg（昨年比76%）、マグロ類 5,469.5kg（99%）、サワラ類10,737.2kg（66%）、シイラ 3,247.6kg（42%）、カジキ類3,940.6kg（44%）と水揚量はそれぞれ減少した。総水揚量の1日1隻当り水揚量は24.3kgで昨年の95%であった。

タカサゴ追込網（県漁連）

県漁連の追込網の総水揚量は771,637.2kgでタカサゴ類が総水揚量の93.9%を占めた。昨年と比較するとタカサゴ類の水揚量は724,598.6kgで昨年の107%で若干増加、1日1隻当り水揚量は843.kgで昨年の88%で減少した。標本船の水揚量は49,843kgで昨年の84%で減少した。

トビウオ類（糸満・県漁連）

糸満漁協に水揚されたトビウオ類は5,165.5kgで昨年の86%、県漁連に水揚されたトビウオ類は30,942kgで昨年の144%であった。糸満漁協に水揚されたトビウオ類の漁期は4月から6月、盛漁期は5月、県漁連の漁期は4月から8月、盛漁期は5月で両地区とも昨年より漁期は短かった。

3. 市場における主要魚種水揚量

沖縄県漁連、那覇地区漁協、糸満漁協に水揚されたハマダイ、ハマフエフキ、スジハタ類、アオリイカの4魚種について水揚量を調査した。県漁連に水揚されたハマダイは226,896.9kgで昨年比103%、スジハタ類は93,648.6kgで昨年比122%、ハマフエフキは29,700.1kgで昨年比87%、アオリイカは60,472.5kgで昨年比104%であった。那覇地区漁協に水揚されたハマダイは144,271kgで昨年比107%、スジハタ類は1,700kgで昨年比111%、ハマフエフキは261.kgで昨年比30%、アオリイカは359kgで昨年比13%であった。糸満漁協に水揚されたハマダイは 8,656.1kgで昨年比68%、スジハタ類は16,423.5kgで昨年比115%、ハマフエフキは18,087.4kgで昨年比81%、アオリイカは3,218.1kgで昨年比38%であった。

個体生態調査

カツオ1本釣のカツオの体長、体重を165尾、キハダを10尾測定した。胃内容物、生殖腺調査はカツオ68尾調査した。ひき縄ではカツオ12尾、ヒラソーダ14尾、マルソーダ3尾、キハダ13尾、体長、体重、胃内容物、生殖腺調査を行なった。タカサゴ類では体長、体重を1,486尾測定し、胃内容物、生殖腺は522尾調査した。トビウオ類は糸満、県漁連の両地区で体長、体重130尾、胃内容物、生殖腺調査は113尾行なった。

標識放流調査

図南丸で4月に200尾、昭和55年3月に3尾計203尾標識放流を行った。

考　察

宮古島のカツオ1本釣は昨年の52%で大巾に減少した。それは時期後半に宮古島南東域に漁場が形成されず、主に赤尾礁近海で操業が行なわれた。昨年島回りに大中判群の群がみられたが今年はあまりみられなかった。今年はカツオ類やトビウオ類、イワシ、アジ、サバ、トビイカ等浮魚類は

一般的に不漁年であった。タカサゴ類は本部が減少したが、昨年同様宮古、八重山からの水揚量があり加えて、伊江島、久米島等の水揚増により総水揚量は増加傾向を維持しているが、1日1隻あたり水揚量は昨年を下廻った。県漁連のハマフエフキ以外の水揚量は若干増加したが、1日1隻あたり水揚量は昨年より減少し、年々減少傾向であり資源的に危険な状態になりつつあると思われる。那覇地区漁協のハマダイの1日1隻あたり水揚量は増加傾向である。これは魚船の大型化による漁場の拡大、装備の充実化によると思われる。糸満漁協のハマダイの水揚量が他地区に比較して少ないのは漁具の違いによるもので糸満ではアオダイ、ヒメダイ等を対象に操業しており、他地区が深海1本釣を行なっているのに対し、糸満では底立縄を主に行ない漁場水深も浅い。そのためアオダイ、ヒメダイ等より深い生息水深を持つハマダイの水揚量が少ない。

要　約

この事業は国庫委託で昭和54年度沖縄周辺重要水産資源調査要網に従って行なわれた。対象魚種はカツオ類（カツオ1本釣・ひき縄）、タカサゴ類（追込網）、トビウオ類（流し刺網・追込網）で地域は県漁連、糸満漁協、本部、宮古、八重山である。これに関連して県漁連、那覇地区漁協、糸満漁協市場のセリ帳から重要魚種の水揚量の調査を行った。

漁獲量調査

カツオ1本釣

本部は昨年並の漁、宮古、八重山は不漁であった。魚体は前半は小判主体、後は大中判主体であった。南方カツオは昨年並の54隻出漁したが史上最高の昨年の76%の漁であった。

ひき縄

総水揚量、各魚種、1日1隻あたり水揚量とも昨年を下廻った。

タカサゴ類

近年増加傾向で、昨年同様、宮古、八重山からの水揚量が増加したが、1日1隻あたり水揚量は昨年より減少した。

トビウオ類

糸満漁協の漁は悪く、県漁連の漁は良かった。

主要魚種

県漁連のハマフエフキを除く他の3種は水揚量は増加したが、1日1隻あたり水揚量は4種とも減少した。那覇地区漁協のハマダイ、スジハタ類は若干増加、ハマフエフキ、アオリイカは減少した。ハマダイの1日1隻あたり水揚量は県漁連とは逆に増加した。糸満漁協はスジハタ類を除き他の3種は減少した。

個体生態調査

カツオ類、マグロ類を1本釣、ひき縄の魚獲物から217尾、体長、体重を測定し、胃内容物、生殖腺調査を110尾、生殖腺、胃内容物522尾それぞれ測定、調査を行なった。

標識放流調査

図南丸で計203尾標識放流を行なった。

なお、調査結果等の詳細は、"昭和54年度沖縄周辺重要水産資源調査結果報告書" として別冊で行なう。